

【ジブンゴト】

全ての人の well being を目指す

【実践者】

氏 名	田中 慧	学校名	私立東洋英和女学院小学部
担当教科等	国語・算数	対象学年（人数）	5年生（80名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月～2月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：全ての人の well being を目指す

単元目標：身近な異文化、貧困に関心を持ち、自分にできることを考えて実行する。

関連する学習指導要領上の目標：

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	国際理解の視点を持って、課題を解決するために必要な知識を、自らが探究する中で身につけている。
② 思考・判断・表現	国際協力の意義を改めて思考し、自らにできることを考え、それを分かち合おうとしている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	単元を通じて理解した事象を自分ごととしてとらえ、積極的に自らにできることを実践しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校はキリスト教主義の学校であり、環境問題、被災地支援、国際協力などの社会貢献につながる活動を「小さいかご活動」と名付けられて行われている。この活動は下記の讃美歌をもとに作られたものである。

小さいかごに

訳詞 富岡正男

小さいかごに花を入れ さびしい人にあげたなら
色も香りも部屋に満ち 気持ち良い日を過ごすでしょう
あいのわざは小さくても 神の力がこもるから
闇夜のような世の中を 真昼のように照らすでしょう

しかし、そういった活動の意味や意義について子ども達が考える機会は学年が上がるほどに少なくなり、子ども達は自分たちが行った募金や支援が一体何のために、誰のために、なぜ行われているのかについて関心を持てていないのが現状である。

また、本校は女子校の私立小学校であり、子ども達は、教育方針、家庭の経済レベルが比較的近い同性のみで構成された集団である。そうした環境だからこそ、得られるよさがある一方で学校の外の社会に対する解像度が高まりづらいという問題意識もある。

以上の状況から、すでに校内で行われている活動の意義、意味を子ども達がより深く考え、世界の課題を自分ごととしてとらえ、現在の自分及び将来の自分がどのように世界の課題に貢献していけるのかの足がかりとなるよう、本単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

全体的にお人好しで、学校の建学の精神「敬神奉仕」（神を敬い、人に奉仕する）をよく理解しており、誰かの役に立つ活動には気持ちよく参加する児童たちである。日々の礼拝や、ボランティア委員会など、日々の学校生活の中で、募金をしたり寄付をしたりといった活動は日常的なものとなっており、参加率も高い。前述の通り、募金や寄付の意義を深く考えたり、恵まれている自分たちの生活を支えている根幹にあるものを振り返ったりする習慣は乏しいが、知的好奇心は高く、積極的に自分のできることを探して取り組むエネルギーに溢れた集団でもある。

〈指導観〉

本単元を進めるにあたり、国際理解を考える上で根源的な「well being」に向き合うことを出発点とした。また、それを具体的に捉えるために身近な異文化として「フィリピン」を設定した。24年度に授業者がバングラデシュへ渡航できなかったということもあるが、本校の目と鼻の先にフィリピン大使館があり、学校周辺にフィリピン関係の店舗が多数存在すること、身近であるにも関わらずフィリピンの国内にはストリートチルドレンや絶対的貧困状態にある人が多数存在する国家であること、そして23年度に授業者が実際にフィリピンへのスタディツアーに参加し、ストリートチルドレンたちと実際に交流した経験があったために、フィリピンを題材としている。

身近なフィリピン、自分たちの知っているフィリピンは比較的豊かなイメージを持っていると思われる。子ども達は、「豊かな国」「貧しい国」を両極端なものとしてとらえている傾向があるので、フィリピンという国を学ぶうちに、状況はより複雑であることを感じさせたい。誰かの well being を考えるためには、その人たちの置かれている環境に関心を持つことの大切さに気づかせたい。

最終的には、学校から与えられた活動に受動的に参加するだけでなく、「誰のために、どんなこと」を自分たちができるのか、児童自らが選んで実践できるように働きかけたい。

05 単元計画（全 5 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時	Well being とは	Well being とは何かを考えさせる。	・活動のタイトルにもなっている讃美歌「小さいかごに」の歌詞から、「さみしい人」「闇夜のような世の中」とは一体何を指しているのか考えさせる。 →その人たちは本当に不幸なのか。 ・日本のジェンダーギャップ指数の低評価を受けて、自分たちは可哀想で闇の中にいると思うか問いかける。 ・Well being について →自分にとっての Well being とは？ ・全ての人の Well being を目指すためにどうすればいいか考えていくことを確認。
	資料・教材など ・ DEAR（開発教育）掲載の「ブレインストーミング」 ・ DEAR（開発教育）掲載の「ランキング」		
2	一番身近な外国～フィリピン～	身近な異文化に目を向ける。	・日本にいる外国人の国籍別ランキングを考える。個別に予想→正解と見比べる。 ・日本全体のランキングと港区のランキングを見比べて思ったことを周囲と話し合う。 ・最も身近な外国「フィリピン」について知る。（位置、言語、宗教、平均年齢など） ・六本木周辺で暮らすフィリピンの方々。（大使館、フィリピン料理のお店、フィリピン仕様の百均の存在）
	資料・教材など ・学校周辺の写真 ・キッズ外務省ホームページ		
3	貧困とは何か	フィリピンの貧困の実態を知り、「貧困」という状態の解像度をあげる。	・フィリピンの写真を見せる① →この子たちがストリートチルドレンであり、インタビューしてきた内容を伝える。 ・フィリピンの写真を見せる② →貧困地区パヤタスのこと、教室にずっとあったぬいぐるみが実はその女性たちの手作りであることを伝える。 ・絶対的貧困と相対的貧困について。 ・解決するためには何が必要なのか考える。
	資料・教材など 2023 年夏に渡航した際の写真や動画		
4	日本の果たしてきた役割	JICA や NGO の果たしてきた役割を知る。	・これまでに日本および日本人がどのようなアプローチを「貧困」に対して行ってきたのかを知る。

			・いくつか紹介する NGO のホームページを読んでペアで紹介し合う。 ・ストリートチルドレンを脱却した青年たちのことを伝える。
	資料・教材など ・JICA コンセプトムービー ・NHK for school 「NGO の役割」 など ・ホームページ（「特定非営利活動法人アイキャン」「シャプラニール」「国境なき医師団」「ACEF 認定 NPO 法人アジアキリスト教教育基金」「チャイルドファンドジャパン」 など） ・ともに歩んだ人々アイキャンの 30 年ー		
5	全ての人の Well being のために	自分たちにできることを考える。	・改めて、解決するために必要なことを考える。 ・これまでに募金や献金をした先のことを一体どのくらい知っているのか。 →それもだめではないけど・・・。 →いいことした気分だけになってないか。 ・「可哀想だから、恵まれている立場の私たちが施してあげる」という思いの何がいけないのか。
	資料・教材など ・DEAR（開発教育）掲載の「ランキング」		

06 本時の展開（○時間目）

本時のねらい：自分にとっての well being を考える。他者の well being に関心を持つとする。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 小さいかご活動の名前の由来を考える。 (今までやってきたことを振り返る) T 小さいかご活動で今までどんなことをしてきたか。 T また、小さいかご活動以外には学外の誰かに向けてどんな活動をしてきたか。 T 小さいかご活動はなぜこの名前なのか。 「小さいかご」の歌を歌う。	これまでに学校で行われてきた活動を包括的に思い出せるよう助言する。
展開 (10分)	2 「さみしい人」とは一体何を指しているのか考える。 T さみしい人とは誰なのか。 【ブレイクストーミング】 ・付箋に書いたものをグループごとのワークシートに貼る。 ・グループで共有・分かち合い ・全体に共有・分かち合い T その人たちって本当にさみしいの？そこにいる人は本当に闇夜の中にいるの？	※意識してほしいこと※ ①質より量 ②評価しない (褒めたり笑ったり否定したりしない) ③長々と説明しない

2 分	3 日本のジェンダーギャップ指数から自分たちを振り返る T 日本のジェンダーギャップ指数って 146 カ国中何位くらいだか知っているか。 T 118 位。皆さんが途上国だと思っているような国よりも遥かに下である。 T 118 位の国の女の子であるあなたたちは、女の子だから不幸なのだろうか。日本の女の子は闇夜の中にいるのだろうか。(中にはそう感じている人もいることと思う。) T みなさんが上位国の人たちから一方的に可哀想だと思われて、集めた募金とか励ましの手紙送られたら違和感がないだろうか。 T みなさんがさっき挙げた属性の人たちも同じではないだろうか。 T では私たちは「小さいかご活動」や献金や支援活動を、なぜ行っているのだろうか。私たちのやっていることの意味とは一体何か。	※ジェンダーギャップとは・・・ 男女の違いにより生じる格差。現状ほとんどの場合は、女性側が社会の中で不利な扱いを受けていることを示している。 ※ジェンダーギャップ指数とは・・・ 世界経済フォーラムが毎年公表しているもので、経済活動や政治への参画度、教育水準、出生率や健康寿命などから算出される、男女格差を示す指標。日本は 2024 年度 146 カ国中 118 位。ただし教育と健康面では世界トップクラス。
3 分	4 well being について知る	well(良い) + being (状態) 「個人や社会の良い状態」 主観的ウェルビーイングと客観的ウェルビーイングの違い SDGs を超えた先の SWGs へ
15 分	5 自分にとっての well being とは【ランキング】 ・ワークシートに一人で順位づけをする。 ・グループで一つのランキングを作る。 ・グループごとに発表する。	※正解は存在せず、自分なりの答えを見つけることが重要であると伝える。 ※人によって変わってくることを伝える。
まとめ (5 分)	6 全ての人の well being を目指す。 T 全ての人が well being な状態とはとても言えない世界の状態。 T 今まで学んできたことや経験は、すべての人の well being のために活かせるだろうか。 T 表面的なデータや思い込みや義務感で支援をすることの是非をどう思うか。 ワークシートに感想を書く。	クリスマスを迎える準備をする期間に特にこのことを覚えて過ごすよう働きかける。

使用する資料・教材：パワーポイントの資料/ブレインストーミング用の模造紙、付箋/ワークシート

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言・ワークシートの記述

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特になし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

ジェンダーギャップ指数という観点で見ると、虐げられている日本の女の子という視点と、幸せに暮らしている自分たちの視点に大きなギャップがあるということに、衝撃を受けている児童が多かった。また、一人ひとりがよりよく生きるために必要なものが、人によって思った以上に異なるということにも衝撃を受けている様子だった。

これまで以上に、自分たちの支援活動が一体誰の何のためになっているのか考えたいというコメントが多かった。

「意外に、日本にもさびしい人がいるんだなと思った。」

「さびしい人って誰から見たさびしい人なんだろう。」

「well being はお金だけが必要なわけではない。」

「家族やお金があるから幸せとかではなく、もう一回ちゃんと見直そうと思った。」

「自分は well being なのかというのをしっかりと考えると、今までかわいそうだなと（私が）思っている人たち自身がどう感じているかはわからないということを知った」

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

今回、バングラデシュに渡航できなかったことによって、国内の異文化という観点を学ぶことができた。日本や外国に限らずどこにどんな人たちがいて、どんな思いでいるのか、もちろん全てを理解し切ることはできないが、アンテナを立てていくことの大切さを痛感した。他の参加者の先生方と話す中で、本校の中でつながりを感じられる異文化が、経済的に発展している北側諸国に偏っているという発見もあり、その発見も授業のアイディアとして活用した。

そして、最も大きかったのは、Well being の概念についてだった。世界のために自分が何をできるのかを考えるためには、「途上国」だけを見つめるのではなく、自分自身や日本国内を見つめていくという視点が必要であること、一方的に寄付や支援をしていくだけではなく、あらゆる分野、産業のサイクルを見直す視点が必要であることを私自身が学んで、衝撃を受けた。これらを児童達に伝えていくために、単年度の授業ではなくて何年も継続して実践できるカリキュラムとして残していきたいと強く思った。

12 苦勞した点

- ・学校行事、校務分掌が立て込んでしまい、授業日をなかなか決められなかった。
- ・5時間計画として設定したが、授業と授業の間が開いてしまい、子ども達が前時の内容を忘れないように折に触れて学級で授業内容について話した。

・この授業自体が、私個人の実践にとどまらず学校のカリキュラムとして定着させていくという目的があるため、本来はフィリピンに関係する外部団体の協力を仰ぐなどの計画もあったが、学校として今後何年間も継続が可能であるのか慎重な検討が求められ、結果的に実現しなかった。

13 改善点

- ・これまでに行なってきた実践をもう少しゆっくり振り返りたかった。授業前に思い出すための課題を出しておけば、今まで自分たちがどういう心持ちで活動に参加していたのかを子ども達を感じることができたのではないかな。
- ・「well being は大切だと思いました」「もっと支援をしたいと思いました」という表面的なコメントに対して、なぜそう感じたのか、具体的には何が必要なのか、深める活動をするべきだった。
- ・自分自身が well being な状況に置かれていない児童の心情にもう少し配慮が必要だった。

14 成果が出た点

- ・日々の募金や支援活動の意義を立ち止まって考える（「本当に役に立っているのか」「どんな意味があるのか」）視点を子ども達が得ることができたために、学級で話をしやすくなった。
- ・今回の授業とは無関係かもしれないが、数名の子ども達が国内外の状況に目を向けて、自らが見つけた NGO の活動に実際参加し始めていた。
- ・この実践自体にはまだブラッシュアップが必要な部分も大きいですが、学校全体にこの活動を定着させていく流れが生まれた。

15 自由記述

国際協力、国際理解を「きれいごと」として終わらせず、「ジブンゴト」として、子ども達にとらえてもらうために、教育者として何ができるのか、他の参加者の方々と語り合い、共に授業を作れたことが本当に貴重な経験であった。参加された先生達の勤務校は校種も地域も異なっていたが、共通していたのは、その学校にただ通っているだけでは見えてこないものに触れるチャンスを教育の力で子ども達に提供したいという志だったと思う。

報告会にて、「この授業を受けた後、果たして子どもたちは他人事から自分事になるのでしょうか」という指摘をいただいたことをきっかけに、何を持ってジブンゴトになるのか、授業そのものが授業者自身の自己満足に過ぎなかったのではないかと悩んだ。身もふたもないことを言ってしまうと、子ども達の思いや心を教師側の思った通りに動かすことはできない。それでも、子ども達が今以上に他者のことを気にかけるきっかけを持ってくれることを願って授業をしている。だからこそ、この実践でよかったのか、どこをどう変えればいいのか、今後も考え続けていくことは大切なのだと痛感した。こうした視点を得られたことを有り難く感じている。

まだ年若い児童生徒にとって、自分とは状況の違う他者のことを自分事としてとらえ、その他者のより良い人生のために貢献するということはすぐにはピンとこない話ではある。それでも、今すぐできることだけが自分にできることではなく、将来自分が選んだ人生の先で大人になった自分が、世界をよりよくするための一つの力になれる、なりたいと希望をもってもらうことが何よりもの願いである。